

絵本をめぐる冒険 —絵本学の現在—

上出恵子 (活水女子大学 健康生活学部教授)

絵本についての研究は、保育や教育関係から始まり、児童文化、文学、そして視覚表現としてデザイン、アートの分野へと広がり、造本、印刷や出版、最近ではブックスタートの普及に伴い、医学、保健分野にも及んでいる。このような絵本についての研究のために、独自の学問領域の確立を目指して、絵本学会が設立されたのは1998年であった。今年が10周年のこの学会は、年1回の大会に加えて、絵本フォーラムも開催し、また紀要(「絵本学」と機関誌『絵本BOOK END』を刊行するという、組織的にはまだ小規模ながら絵本への熱い思いが感じられるものとなっている。さて、この絵本学会でも繰り返し述べられているのは、絵本学の多分野多領域にわたる学際的な性格であり、その困難と可能性であった。

「絵本学会の10年は、同じ絵本という言葉に象徴されるものをめぐり集まった人々が、それぞれが依拠する“絵本”の概念に揺さぶりをかけられ、とりあえずはその概念が修正・解体された10年であったとも言えるのではないか⁽¹⁾」絵本学会会長の佐々木宏子はこのように述べて、この“解体”は創造のための“破壊”の意味を含み、研究のパラダイムの質的変換を促すものでもあると付け加えている。近代化の中で細分化された知の在り様を炙り出すものとして絵本学はあるとも言えるが、では、なぜ絵本学は学際的もしくは横断的であるのかと言うなら、その対象である絵本がまさにそのようなメディアであるからなのである。

絵本について今井良朗は「あらゆる表現領域が入り込んだメディアとしての面白さ⁽²⁾」を指摘し、次のように続けている。「文学性、アート性、デザイン性、映像性、場合によっては音楽的な要素も含めて、これほどさまざまな表現分野を取り込んだメディアも珍しいと思います」。また、デイヴィッド・ルイスは「ひとつのジャンルというよりは柔軟にからみあう複数のテキストの集合体⁽³⁾」ではないかとも述べている。「絵本とは本来的に異なる類のものの集まりであり、一つのジャンルというよりは柔軟にからみあう複数のテキストの集合体であり、時代の文化全体の変化に容易に適合するものであるということなのだ」。

以上のように絵本というメディアの多面性・多様性についての言及には事欠かないが、このような絵本とは何か、またなぜ絵本は「あらゆる表現領域が入り込んだメディア」「柔軟にからみあう複数のテキストの集合体」なのか、ブックスタートを通して考えてみたい。

ブックスタートとは、1992年にイギリスで始まり、日本では2000年の杉並区でのパイロット・スタディの後に翌2001年から始まった、地域に生まれたすべての赤ちゃんに保護者にメッセージとともに絵本を手渡すという市区町村自治体の事業である。おもに地域の赤ちゃんが集まる0歳児健診などで行われているが、2007年9月30日現在、627市区町村(全国の市区町村数は1827)が実施している⁽⁴⁾。このブックスタートでなぜ絵本なのかについては、すでに絵本『いないいないばあ』(松谷みよ子・文、瀬川康男・絵)を絵本デザイン(絵本の形、ページ、構成と展開、絵のスタイルなど絵本全体の作り方)から取り上げ、赤ちゃんに絵本との関係を考察した正置友子の精緻な論考⁽⁵⁾もあり、また紙幅に限りもあるので、ここでは絵本というメディアをその機能的な側面から探ってみたい。

結ぶもの——コラボレーション

ブックスタートは、おもに0歳児健診で行われるため、今まで接点のなかった図書館員、保健師、行政職員、ボランティアの人たちが連携をはかり、地域社会を巻き込んだ活動となっている。これもひとえに絵本が可能にしたものであるという大袈裟に聞こえるかもしれないが、絵本とは文学的に言うなら「大いなる単純さと大いなる複雑さとを結びつけるもの」(ヴィクター・ワトソン&モラグ・スタイルズ)⁽⁶⁾であった。また、そのように作られたのが絵本なのであった。

いうまでもなく本作りとは、著者(作家、画家など)、編集者、デザイナー、印刷者など、実に多くの人の手によるものであった。絵と文(ことば)から成り、コラボレーションということがふさわしい絵本はこのことを明確にすると同時に、文字なし絵本も念頭におくならば、ページをめくりながらそこに物語世界を読み

込んでいく読者も含めて成り立つ生成のメディアなのであった。このような絵本という磁場に様々なものが引きつけられ結ばれ、ブックスタートも裾野を広げているのだと言えよう。

手渡されるもの——プレゼント

絵本はブックスタートにも明らかなように子どもたちに手渡されるもの=文化である。この点では玩具もまた同様なのだが、玩具と異なるのは幼い子どもたちが絵本をいつも大人と一緒に楽しんでいるということだろう。絵本についての思い出が懐かしく温かなものとして想起されるのは、おそらくこのような親和的な、いわば愛の体験に由来するのであろう。人との繋がりが濃厚なものとして、絵本は存在している。

向き合うもの——対面コミュニケーション

ブックスタートの絵本では、『いないいないばあ』（前出）や『おつきさまこんばんは』（林明子）など正面向きの顔の絵が目を引く。いわゆる正面性というものであるが、その代表ともいべきブルーナの『うさこちゃん』シリーズにおいて、それは「読者といつも対話したい」⁽⁷⁾からだと言われている。

人間が最初に出会うのは、つまり赤ちゃんが最初に見るものとは、おそらく自分を見つめる正面向きの顔であろう。したがって、その形態、アイコンタクトがコミュニケーションの原点となるのである。

「人間の大事なコミュニケーションのひとつにアイコンタクトがあるように、見つめあうこと、そして、正面から受けとめることが、幼い子どもたちにいかに大切なことか。それをうさこちゃんは絵本で表現しているのだ」⁽⁸⁾と述べるのは岩崎真理子であるが、人の育ちに最も必要なものがブックスタートの絵本にはある。さらに、このような絵本は子どもたちにとっては声に出して読まれるものであったというを思う時、「声のいちばん最初の形態というのは、意味内容の伝達ではない、もっと全体的なコミュニケーションだ」⁽⁹⁾と谷川俊太郎が指摘するように、声を内包した絵本はこの点においても人間にとってきわめて重要なメディアなのである。

確かなもの——リアル

絵本は視覚表現として視覚のみならず、読み聞かせにおいては聴覚に訴えるものであり、さらに〈もの〉としての手触り=触覚、独特のにおい=嗅覚、また幼い子どもたちは往々にしてなめたり、かじったりするように（それ故に安全性ということが問題にされるわけだが）味覚にも関わるものであった。このように五

感を刺激する絵本は、人間の身体性に関わるものとして、確かな実在・現実として、今日のデジタル化社会の中でその重要性が一層問われるものとしてある。

いうまでもなく絵本は決して重厚なメディアではなく、どちらかと言えばコンパクトで手軽なものである。しかし、たかが絵本、と言いきれないものがあることを、私たちは以上のようなブックスタートに垣間見ることができる。つまり、それはきわめて人間的な営みに根ざしたものであり、それ故にブックスタートは強く支持され、展開しているということなのである。

従来の「子どもから大人へ」という個体発生過程を問う発達心理学から、世代から世代へのリサイクル性に着目し、「育てられる者から育てる者へ」という生涯過程全体を見据えた関係発達心理学を提唱する鯨岡峻は、「一人の人間の生涯過程は、本来、常に世代をあい前後する人たちの生涯過程と複線的に同時進行するものだ」⁽¹⁰⁾と指摘している。このような人間の生涯過程に絵本も寄り添うものとしてある。それは世代から世代へ引き継がれ、世代を繋ぎ、生身の人間の今とあまたの人々の思いと時間が複雑に交錯し、変容・生成する場なのであった。

世代を超え、読み継がれ、手渡されていく絵本。人間の営みに深く根ざし、その在り様を際立たせる絵本。絵本学とはこのような絵本をめぐる冒険の謂に他ならないのである。

【注】

- (1)佐々木宏子「絵本アニュアルレポートの発行と絵本研究」『絵本BOOK END』2007
- (2)吉田新一他「絵本学会歴代会長座談会・絵本学会の十年を振り返る」『絵本学会の10年』2007
- (3)デイヴィッド・ルイス「絵本はなぜ多様で自由な形態をしているのか」『子どもはどのように絵本を読むのか』ヴィクター・ワトソン&モラグ・スタイルズ編、谷本誠剛監訳 柏書房 2002
- (4)詳細は特定非営利活動法人ブックスタートのホームページ (<http://www.bookstart.net/index.html>) を参照
- (5)正置友子「あかちゃんと絵本に関する考察—絵本『いないいないばあ』を中心に—」『聖和大学論集』33号A 2005
- (6)ヴィクター・ワトソン&モラグ・スタイルズ編、谷本誠剛監訳『子どもはどのように絵本を読むのか』前出
- (7)『ディック・ブルーナのすべて』講談社 1999
- (8)岩崎真理子「世界中の子どもともだち—半世紀愛されつづけてきたうさこちゃん—」『絵本を開く—現代絵本の研究—』谷本誠剛・灰鳥かり 人文書院 2006
- (9)谷川俊太郎「語り 声の現場」『声の力』河合隼雄／阪田寛夫／谷川俊太郎／池田直樹 岩波書店 2002
- (10)鯨岡峻『<育てられる者>から<育てる者>へ—関係発達の視点から—』日本放送出版協会 2002